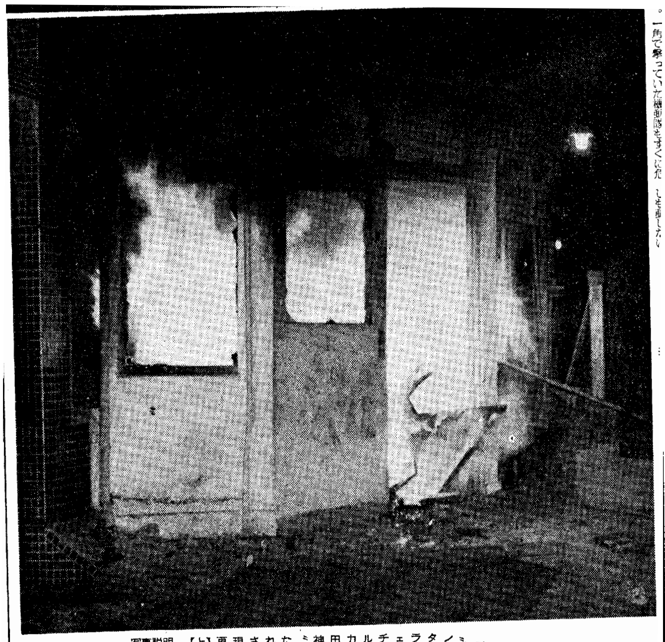

写真説明 【上】再現された"神田カルチエ・ラタン" 【中】数寄屋通りにつくられた"銀座解放区" 【下】燃えあがる鍛治橋交番

一角で撃っていた機動隊もすぐに危 しも動じない

銀座 ①

有楽町駅はシャッターを下ろしているため駅構内はガランとして二、三人の駅員が寄り集まって相談しているのが見られる。これとは対照的に多数の群衆が駅のまわりの歩道や路上に集まり続けている。有楽町駅交番のガラスはわれ、中は真っ暗。催涙ガスも充満しているため目が痛い。

銀座方向からデモを指揮する笛の音が聞こえてきた。数寄屋橋交差点にかけつけると、数寄橋のマンモス交番はすでにメチャメチャ反戦青年委員会を中心とするデモ隊が交差点から銀座四丁目にかけてデモっている。歩道という歩道は群衆で一杯の状態である。しばらくしてから日比谷公園方向より機動隊が規制のため前進して来たデモ隊はすぐに投石で立ちむかうが機動隊のガス弾の発射でやや後退気味。はじめは三十度ほどの仰角で撃っていた機動隊もすぐに危険な水平撃ちをするようになったデモ隊がひるんだすきに機動隊が総攻撃をかけてきた。逃げ遅れた学生三名が検挙された。さきほどまで明大前で規制した第四機動隊の出動である。

機動隊は、数寄屋橋交差点付近の路上全般を完全制圧した。なおも人々は銀座四丁目方面から投石を繰り返す。だが、石は機動隊のいる場所まで達しない。まわりを埋めつくした群衆から"カエレ""カエレ"との声が高まった。これらの声にいきりたった機動隊は群衆に対してもジュラルミンの楯をふりかざして排除にのり出した。文句をいう通行人に対しては容赦なく検挙してゆく機動隊員。

しばらくしてから数寄屋通り方面から投石にまじって火炎ビンが五、六本投げられた。機動隊から隔ったところで炸裂。機動隊は少しも動じない。

その後西銀座デパートわきの道路上で反戦青年委員会約一〇〇〇人が集会、デモを行なっていた。有楽町駅方面から出動した機動隊はこのデモ、集会の規制にのりだしたが、反戦青年委員会の労働者はひるまず応酬。激しい投石を繰り返して機動隊を駅まで追撃し"闘う労働者"反戦青年委員会の優勢かとみえた。しかし、すぐに機動隊は応援部隊の援助により力をもり返し、デモ隊に対し実力行動にうって出た。ガス弾は腰を低くかがめて撃つ完全な水平撃ちである。デモ隊と機動隊の両者間で孤立状態になった報道陣に対してもガス弾を打ち込む。眼前でサク裂し、ガス煙が舞上る。

数寄橋通りに戻ると、道路上には石が散乱してころがっている。霞ケ関周辺の敷石は取りはずされていたが、銀座周辺の歩道にはまだ敷石が残っていた。労働者・学生達はリレー式で石を運び、砕いている。道路上の"解放区"では市民と労働者、学生が討論している。高速道路下の数寄屋通りにバリケードが構築され「解放区」のベニヤ板が立てかけられている。道の一ケ所に補修用のタールのドラムカンが倒れ、ドス黒い炎をあげ天高く燃えている。のちに消防車二台が駆けつけ、ようやく火を消しとめた。

バリケードの向こう側から鍛治橋までは集会を終えデモ行進して来たベ平連約二〇〇〇人が座り込み集会を開催している。先導の自動車には機動隊の見境いない狂気のガス弾の水平打ちによる直撃を受け重傷を負っている高校生一人が横わっていた。三〇米離れてもベニヤ板をブチ抜く威力を持つというガス弾の直撃を受けたら深傷を負うのを推測できないはずはない。皮膚をも犯すガスとあいまってガス弾は今や機動隊最大の攻撃武器となっている。集会にはあらゆる階層の人々が混じっている。全学連セクトのヘルメット学生も見える。約一時間ほどしてグループごとに京橋方向へ移動していった。その場所に残ったグループも沢山ある。

鍛治橋交差点では以前から激突を繰返していた。ここにもバリケードが築かれていた。九時すぎ、突然鍛治橋交番から火の手があがりどんどん燃えていく。機動隊は橋の上にジュラルミンの楯を並べ防波堤を形づくっている。労働者学生は都庁第二庁舎前からも石を投げ攻撃するが、間断ないガス弾の水平打ちに一瞬ひるむ。投石には労働者、市民が多数参加している。直撃に多数の負傷者が出ている。直撃弾よけにベニヤ板を楯に機動隊に立ち向ってゆくものもいる。東京駅から来た黒マル派学生も加えてデモ隊はもりかえした。竹ヤリ、鉄パイプを持ったヘルメット学生が投石部隊の支援の下に直撃弾の飛来するなかを機動隊の列に突進していく。ガス弾乱射に周辺はガスの白煙が立ちこめ、見通しが悪くなる。態勢を整えたのちデモ隊は一勢に進撃し、投石を繰返すも、水平投ちに退歩を余儀なくされた。交差点での攻防戦のなか、庁舎横に駐車していた乗用車二台が横倒しされ、一台に火が放たれた。

騒然としている状況で、車放火により機動隊は一勢にガス弾を乱射して攻撃に展じた。デモ隊は散り散りバラバラになって逃げる。数寄屋橋方面よりも機動隊が出現して、庁舎前の見物人は逃げ場を失ない、隊員に追いつかれ、警棒楯でメッタ打ちに合っている。世間で過剰警備を問題視しているが現場ではいつも平然と行なわれている事実である。機動隊員はこの日も現場を撮影していた数人のアマ・カメラマンを隊列に引込み暴行を加えた。白ワイシャツを着た男性は隊列のなかでなぐるけるの暴行を受け、最後に大柄な隊員に楯で足を力いっぱいに突かれた。他の隊員は"ヨーシ""ヨーシ"と叫び、その隊員の肩をたたいている。男性は足を引きづり、命からがら逃げのびた。逮捕し、連行しないで暴行を加えたあと釈放するのは機動隊の常套手段であり、残忍なやり方である。国家権力を背景にもつだけにそれらのことが適法行為になっている。まったく市民の感覚と大きな断絶が存在している。

高速道路上を数寄屋橋交差点に戻った。銀座通りは車の通行が再開されていた。まだ機動隊が警戒にあたっている。群衆もなかなか立ち去ろうとしない。交差点角のコーラ会社の宣伝ネオンサインは今日の眼下の出来事と無頓着を装おい、ダンスに、ボクシング、サッカーに打ち興じている。銀座の夜の灯にも変化はない。四・二八沖縄デーは深浅の差こそありにすれ、人々の意識の中にはいり込むであろう。沖縄に対する人々の関心が深まることを確信して現場を離れた。遠望すれば霞ヶ関ビルはいつも変らず、赤い警告灯を点滅し暗闇のなかにある種のぶきみさをもって立っていた。

銀座 ②

夜、九時。オシャレ・ネオン・ハイペイを誇る銀座が最も銀座らしくなる時間である。

しかし、この日はある者には革命前夜を感じさせ、ある者には暴徒が荒れ狂う許しがたい情景を感じさせた。

一夜明ければ、前者は夢に過ぎなく、後者は昭和元禄のハプニングに映り、銀座は再び世界のギンザに帰るだろう。首都・東京の上っ面はどす黒く塗りつけられる向かがあった。

中核系反戦青年委員会、ヤングベ平連を主力とする学生・青年労働者・群衆（一般紙はヤジ馬とかたずける群衆であるが、少なくともこの日に限り自分に関係あるものとして事態を受けとめた＝意識をもった率先助成者に思える）はこの時期になっても一行に減らなかった。約一〇〇〇人のヘルメット部隊を中心として"銀座解放区"内には約二万人がおり、学生運動の街頭戦術・同時多発化について行けない国家機動隊を寄せつけなかった。

態勢を立て直しを図る機動隊はこの間、"特別遊撃隊"と思える部隊が外堀通りを換声をあげ、ガス弾を乱発しながら、数寄屋橋交差点から鍛治橋につっ走ったにとどまった。

一方、学生・労働者は、路地を利用し、逃げ込んでは次のブロックに現われ投石を繰り返した。そして一般人を完全に巻き込んだ行動を展開していった。

そして圧倒的数をもって九時五分には、鍛治橋で逃げ遅れた機動隊員一人に、これまでの弾圧を一気に復讐するがごとく、襲いかかった。これを撮ろうと商売根性まるだしの報道陣に対しても、事後の証拠となることを恐れてか、そのストロボやカメラにゲボ棒をふるった。

すぐ後、機動隊がかけつけその隊員をとりもどしたが、この際こんどは機動隊が報道陣に向かって「お前ら見ててどうして助けねえのかと」襲いかかった権力を盾にした剣幕で。ならば、機動隊が学生を乱打するのを報道陣は制することができただろうか。否、決してそうではない。わが身の幸いとカメラを無慈悲にかまえるだけである。

学生・機動隊双方から攻められる辛い立場の報道陣であるが、センセーショナルな映りの良い画を求めている限り、その人間性に於いて許されるものではあるまい。そういったものが一気に表面化したような感じがした。

九時十五分には鍛治橋の交番が黒煙を吹いて燃えあがり、あたりを赤々と照らし出した。この頃には地下鉄京橋駅などからデモ隊も帰り始めていたが、この炎に志気を高められたのか、学生・青年労働者は都庁前に止まっていた乗用車二台を倒し、このうち一台に火をつけた。さらには孤立して、動かない機動隊に対してゲバ棒・投石攻撃をかけた。機動隊はジュラルミンの楯で周りと頭上に外壁をつくり、動かぬハリネズミのようであった。

九時三十分頃は解放区内の頂点のような雰囲気があった。

そしてその直後、九時五十分。あらゆる方面から機動隊が、解放区内へ突入した。学生・青年労働者は散々追われ、"銀座解放区"は一瞬に消えた。同時に新しい世界が消え、廃墟に化してしまった。あれ程いた解放区組織者はどこへ行ったのだろうか。

あとには二重に陣を敷いた、機動隊創設の圧倒的な"大銀座解放区"ができ上がり、酔客のからむイザコザがあちこちに展開されているだけであった。

一九六九年四月二十八日の夜は一部の新聞社が報道するように、「腹いせ」や「狂気の歓喜」ではなく直接的にかかる、国家の技術的暴力に対する最大の抗議であり国民全員にかかっているそのような不断の脅威に対する最大の直接行動として、新しい世界、「銀座解放区」が現出したように思えた。